

伊勢物語八七段「むかしの歌」と萬葉集・石川少郎歌

影 山 尚 之

—

むかし、男、津の国むばらの郡蘆屋の里にしるよしして、いき
て住みけり。むかしの歌に、

蘆の屋の灘の塩焼きいとまなみつげの小櫛もささず来にけり
とよみけるぞ、この里をよみける。ここをなむ蘆屋の灘とはい
ひける。(伊勢物語第八七段)

「むばらの郡蘆屋の里」は摂津国兔原郡葦原郷、元和本和名抄卷
五に「兔原(宇波良)」の訓が見える。そこは古代山陽道「葦屋駅」(延
喜式)が設置され文字通り交通の要衝であった。神戸市東灘区所在
の深江北町遺跡からは数次にわたる発掘調査により「驛」字を記し
た墨書土器が複数件出土している^①ので、同遺跡および隣接する津知
遺跡(芦屋市内所在)が葦屋駅址に相当することはほぼ確実である。
しかるに、萬葉集中に当地をうたうものは、

葦屋の菟原処女の奥つ城を行き来と見れば音のみし泣かゆ

(9・一八二〇 高橋虫麻呂歌集)

を含む三首のみ、すべて処女塚伝説関係歌——他二首は一八〇一田
辺福麻呂歌集歌、一八〇九虫麻呂歌集歌——であり、ほかへ拡がら
ない。近接する「敏馬(浦・崎)」関係歌が萬葉前後期にわたって
八例に上ることを思えば、「葦屋」に対する歌びとの関心の低さが

知られる。

島伝ひ敏馬の崎を漕ぎ廻れば大和恋しく鶴さはに鳴く

(3・三八九)

「敏馬」は瀬戸内海航路上の要津であったから、この偏りは官人の
東西移動における交通手段を反映するのだらう。

一方、平安時代に下ると「あしのや」は歌枕に成長し、二十一代
集に二〇首余の例を数える。ただし三代集には所見がなく、千載集
から増えはじめる。左第三例の新古今集歌は伊勢八七段「むかしの
歌」を業平作として収録したものである。

題しらず

藤原為真

蘆の屋のかりそめぶしは津国のながらへゆけど忘れざりけり

(千載 恋四八七四)

初会恋の心を

俊頼朝臣

蘆の屋のしづはたおびのかたむすび心やすくもうちとくるかな

(新古今 恋歌三一・二六四)

題しらず

在原業平朝臣

蘆の屋の灘の塩焼きいとまなみつげの小櫛もささず来にけり

(新古今 雑歌中 一五九〇)

一義的にこの語は「蘆」をもって葺いた粗末な小屋の意を喚起する
ため(右第二例はそれに該当)、歌枕「あしのや」にもいきおい質

素で侘しい住居の印象が随伴する。平安時代和歌が「葦の仮寝」「葦の丸屋」「葦の篠屋」の歌語を蓄えることは周知だ。歌枕化ののちの「あしのや」はその指す範囲が拡大して、

女の、あしのやへぶきとかけるてならひを見て、かきそ

へ侍りける 源重之

あしのやのこやのしのやのしのびにも人に知られぬふしを見せ
なん (続後撰 恋歌一 六五四)

のように武庫郡の地名「昆陽」(現在の伊丹市域)と共存する事例までを生じてゆくが、詞書に記すとおり上三句はすなわち質素な設え「葦の屋の小屋の篠屋」への連想を求め、「あし(葦)」「しの(篠)」
「ふし(節)」が縁を結んで、人目を忍ぶ侘しい逢瀬の景を演出する。
遡って古事記中卷神武天皇条の歌、

葦原のしけしき小屋に菅置いや清敷きて我が二人寝し
の風情が後の和歌に長く揺曳するともいえる。

片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典増訂版』が指摘するとおり、伊勢
八七段所収歌が後世に影響を与えて「あしのやのなだのしはやき」
は広く継承・再生産された。古今和歌六帖卷五「くし」が、
あしのやのなだのしはやきいとまなみつげのをぐしもささずき
にけり (古今六帖 5・三二八〇)

を掲載するのは伊勢からの採録であろう。私家集ほかを見渡すとき
には、

葦の屋の灘のしはやきいとまあれや磯山桜かざすあま入

(秋篠月清集 一〇三二)

葦の屋の灘のしはやき我なれやよるはすがらにくゆりわぶらん

(金槐集 四七〇)

葦の屋の灘のしほくむあまもしほるに袖のいとまなきまで

(千五百番歌合 一三二一〇)

葦の屋の灘のしほくむあまのそでぬるればとてや月もすむらん

(後鳥羽院御集 一二八八)

葦の屋の灘のしほぢをこぐ船の跡なき波に雲ぞかかれ

(草庵集 一二四)

などを容易に拾うことができる。

二

新古今集は在原業平朝臣歌として一五九〇歌を掲載したが、伊勢
には「むかしの歌」とあつて「むかし男」の詠ではない。この物語
が「むかしの歌」を紹介するのは八七段のみである。片桐洋一氏『伊
勢物語全読解』は、歌を含む先の一節を当段冒頭に据えた意義につ
いて次のように説いている。

摂津の国の芦屋を知らない享受者に芦屋のイメージを与えるの
が最も大きな目的であつただろうが、この文章だけで芦屋のさ
まが髻髷してくるとは思えない。私はこの部分が、芦屋の海浜
のさまを描いた絵とともに鑑賞されていたのではないかと思
う。絵だけではどここの絵かわからないし、歌物語として成り立
たないから、古歌めかした和歌をわざわざ詠みあげることによ
つて、物語の一つの場面として成り立たせたのではないかと
思う。

だが、地理と風土の情報が物語の享受に欠かせないのであればほか
にも絵と古歌とが要請される段があつてしかるべきだから、その点
だけをとりえても右の説得力は高くない。絵とともに物語を鑑賞す

る慣例を想定するのはよいとしても、「むかしの歌」を引用した意図は右とは別のところに考慮されなければならないまい。

八七段の物語では葦屋の里に住む「男」のもとへ「衛府の佐ども」が集い、男の兄である「衛府督」も加わって、海辺より布引滝へ繰り出し、その帰路にもまた翌朝にも歌が詠まれる。

かの衛府督まづ詠む。

わが世をばけふかあすかと待つかひのなみだの滝といづれ高けむ —— I

あるじ、次に詠む。

ぬき乱る人こそあるらし白玉の間なくも散るか袖のせばき —— II

と詠めりければ、かたへの人、笑ふことにやありけん、この歌にめでてやみにけり。

帰りくる道遠くて、亡せにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。やどりの方を見やれば、海人の漁火多く見ゆるに、かのあるじの男詠む。

晴るる夜の星か河辺の蛩かもわが住む方の海人の焚く火か —— III

と詠みて、家に帰り来ぬ。その夜、南の風吹きて、浪いと高し。つとめて、その家の女の子も出でて、浮海松の浪に寄せられたる拾ひて、家の内に持て来ぬ。女方より、その海松を高坏に盛りて柏をおはひて出したる、柏に書けり。

渡つ海のかざしにさすといはふ藻も君がためには惜しまざりけり —— IV

田舎人の歌にては、あまれりや、足らずや。

瀑布の比高と自身の不遇を重ねて人生を観照する I、その沈鬱を奇抜な発想で受け取って場を笑いに転じる II、都びとには馴染みの薄い海辺の景を感傷的に見つめる III、その海からの賜りものである「海松」を食膳に供するに寄せて客人を祝福する IV、四首はどれも即興的機知に富み、都びとならではの教養と風流が凝縮した歌々と評しうる。わけても、海上の漁火を天上の星・河辺の蛩と見紛うてあらゆる光の明滅を取り揃えた III の趣向、歌を記した柏を添えることで野鄙な食材に新奇な価値を与えた IV の雅趣は、ともに秀逸だ。不遇をかこちつつも、右の歌びとらは生活によって疲弊していない自由な精神、いわば余裕を保持している。現場は都を遠く離れた海辺の地、風・浪に身を曝し目慣れぬ風物に接しながらかかる雅びを實現しえたのは、「なま宮仕へ」する「男」が「行きて住」んだからこそであつた。風土の本質は怪しい海浜、それに反して現出する風流、「男」の不在によってその際やかな対照が出来る。

すなわち、「むかしの歌」には当地新旧の対照を印象づける機能が期待されていると見届けるのがよいだろう。一首は、現行注解書の多くが採るとおり、海人の女性が塩焼きの労働の多忙さのせいで黄楊小櫛も挿さぬまま男との逢瀬の場所にやってきた、の慨嘆をうたったものと解される。「来にけり」を「世をわたる」意に解して身を飾ることのない生活を長く継続している嘆きを汲みとるのも一案ながら、「つげの小櫛」を海人娘子年来の所持品と見るよりは恋しい男からの贈り物とするほうがふさわしい。

君なくてはなぞ身装はむくしげなる黄楊の小櫛も取らむとも思はず

櫛も見じ屋内も掃かじ草枕旅行く君を齎ふと思ひて

処女らが後のしるしと黄楊小櫛生ひ変はり生ひてなびきけらしも

(19・四二二)

右を参照するまでもなく、櫛は身だしなみを整える具であるとともに「君」との繋がりを実感するアイテムだった。だから、何を描いてもそれを身に付けることを優先すべきなのに、ゆとりのない多忙な暮らしゆえ不本意にも犠牲にせざるをえなかった、と悔いがあるのである。竹岡正夫氏『伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成』が「衝動的な恋しさに、つい男のもとに逢いに来てもうた、切なる恋の歌」と説くのは、外れてはいないけれども、小稿は都会の洗練とはほど遠い身の上に対する悲観的自覚をむしろ一首の主情ととらえたい。「男」が「行きて住」むまでの蘆屋の里はかように荒んだ海人の里なのであった。

物語の末尾に「女方」の歌Ⅳを指して「田舎人の歌にては、あまれりや、足らずや」と論うのには「むかしの歌」との対比を讀者に求めるねらいがある。趣旨は伊勢三三段「田舎人の事にては、よしやあしや」と等しく、鈴木日出男氏『伊勢物語評解』に「田舎人の歌なのにと貶すことによって、逆にこの歌じたいのすぐれた点を強調していよう」とするとおり歌の巧妙への称賛と見られるが、同時にこれは、「男」をはじめとする「衛府の佐ども」集団の風流を誇る評言でもあったはずだ。「田舎（あなか）」は、一見すると類義に思える「鄙（ひな）」とは違い、都の風雅と対立しない。

式部卿藤原宇合卿被使改造難波堵之時作歌一首
昔こそ難波みなと言はれけめ今は都引き都びにけり

(3・三二二)

田舎は条件さえ整えば都に昇格することさえある地であり、どこま

でいっても非文化的領域を脱しない鄙とは根本的に異なることを宇合歌は主張している。「田舎わたらひしける人」（伊勢二三段）、「片田舎に住みけ」る男（同二四段）はいずれも都びとの洗練を身につけた、「宮仕へ」に堪える人物としてあらわれていて、都会的文化の届かない鄙の住人を意味するものではない。

かつては鄙であった海辺に風流を移植し得た「男」たちの矜持を「田舎人」に読み取るとは、あながち誤りではないと思う。

三

ところで、「むかしの歌」の祖型を次の萬葉集歌に認める見解が広く支持されている。もともと、変容してゆく中間的な歌形を見いだせないため、どのような経路を辿ってこれが伊勢に流入したかは不明とするほかない。阪口和子氏が「万葉歌の異伝もしくは伝承歌というよりも、八十七段の作者が物語に合わせて変更したとみてよいだろう」と述べるのがまずは穩当である³³。

石川少郎歌一首

然之海人者 軍布菰塩焼 無暇 髪梳乃小櫛 取毛不見久尔

(3・二七八)

志賀の海人はめくり塩焼きいとまなみくしらの小櫛取りも見なくに

右今案 石川朝臣君子号曰少郎子也

右は塙書房『CD-ROM版萬葉集』に依拠して掲げたが、第三句の訓については異説がある。『校本萬葉集』により古写本の付訓状況を確認すれば、「カミケツリノラクシ」（紀州本、類聚古集、「カミケツリノコクシ」（古葉略類聚抄）、「カナテノラクシ」（細井本、

神宮文庫本)、「ツケノヲクシ」(西本願寺本、大矢本ほか／西本願寺本「ツケノ」はもと紺青)などが与えられており、紀州本は漢字本文左に朱「ツケノヲクシヲ」、細井本・神宮文庫本は「髮梳」の左に「クシケ」を記す。廣瀬本の訓は「クシケノヲクシ」、左右に「カミケツリ」「カナテ」を付記してともに見せ消ちとしている。こうした様相下で仙覺『萬葉集注釈』は大隅国風土記逸文「大隅郡串ト郷」に、

…使者報導有髮梳神、云可謂髮梳村。因曰久西良郷。(髮梳者、隼人俗語、久西良。)今改曰串ト郷。

とあるのを根拠として「クシラノヲクシ」に改め、頭書して「或説云、クシラノヲクシトハ、ツゲノヲクシノコト歟」と注した(萬葉集叢書本)。西本願寺本ほかの「ツケノヲクシ」は仙覺による訂正訓、ただし「髮梳」二字に即して訓まれたものではない。

近時のテキスト・注解類が採用する訓は「クシゲノヲクシ」「クシラノヲクシ」の二通りに絞られており、そのうちでも後者が次第に優勢になっている(注釈書略称は慣例による)。

クシゲ―新潮集成、小学館新編全集、増補訂版本文篇、伊藤积注など

クシラ―西宮全注、岩波新大系、平凡和歌大系、阿蘇全歌講義、多田全解、和泉新校注、岩波文庫(新)など

前者に従えば歌意は明快になるものの、澤瀉久孝『萬葉集注釈』が批判したとおり「髮梳」を「髮笄」の借訓と見るのは複雑に過ぎ、風土記逸文の孤立事例とはいえ文献上に拠りどころをもつ後者には及ばない。しかしながら隼人方言「クシラ」を梳る意と解するときには、そもそも「くしけづる」具である「櫛」との重複がいかに

不調和にうつる。土屋文明『萬葉集私注』が、

想像するに作者石川少郎は任に九州にあつて、此の興味深い俗語を聞く機会を得て、それに興じ直ちに取つて己が歌中にとり入れたものであらう。

と述べて一首の制作動機を「クシラといふ方言に對する興味」としたのは、意外にも従う向きが少なくないが、牽強附会の感をぬぐえない。動詞「櫛ル」を想定してその名詞形と見る場合にも、同じく重複は回避されない。後代の歌集が萬葉集の当該歌を採録する際、一様に「くしげのをぐし」の本文に拠るのは、その意味で領かれる。志賀のあまのめかりしはやきいとまなみくしげのをぐしとりもみなくに(夫木 雑部 一五四〇)

しかのあまのめかりしはやきいとまなみくしげのをぐしとりも見なくに(新勅撰 雑歌 一三三七)

伊勢「むかしの歌」は、経緯はともかくとしてこれを「つげのをぐし」に改めることで安定する。「つげのをぐし」は「つげのまくら」と並んで平安時代和歌の頻用する語である。

かくしこそかくしおきけれ旅人の露はらひけるつげのをぐしを(実方集 一三九)

いとどしく朝寝の髪は乱るれどつげのをぐしは挿さま憂きかな(和泉式部続集 五八二)

人知れぬ心ひとつに嘆きつつつげのをぐしぞ挿すそらもなき(新勅撰 恋歌 一六四六)

萬葉集においてすでに定着した歌ことばであったことは、先掲一七七七、四二二二歌のほか、

…蟻の腸 か黒き髪に 真木綿もち あざさ結び垂れ 大和の

黄楊の小櫛を 抑へ刺す うらぐはし兒 それそ我が妻

(13・三二九五)

などによって了解できる。古写本に見える「カミケツリノラクシ」などは言うまでもなく、「くしげのをぐし」の語をもつて新たな一首を構成する試みも以後には出現しない。伊勢が披見した萬葉集写本の状況にかかわらず、伊勢が当該文脈上にこの語以外を選択する余地はなかったと見てよいであろう。「蘆の屋」(蘆で葺いた小屋)の質素で侘しい暮らしと、海人にとっては過分に贅沢な「つげの小櫛」との落差が、読者にこの海人娘子のいじらしさを深く印象づけることとなる。

四

萬葉集の石川少郎歌がどのような環境下で詠出され、いかなる心情を託したものなのか、孤立した掲出様態からは推測の手がかりが得られない。卷三「長田王被遣筑紫渡水嶋之時歌二首」(二四五・六)に和した石川大夫歌(二四七)の左注には、

右今案 從四位下石川宮麻呂朝臣 慶雲年中任大貳 又正五位

下石川朝臣吉美候 神龜年中任小貳 不知兩人誰作此歌焉

とあり、これと当該歌左注とを引き合わせて石川君子(吉美候)神龜年中大宰小貳在任時の詠と解するのが現在の通説だが、諸注が懸念するとおり当該歌の前後には高市黑人作歌が並ぶのだから、一首の作歌時を引き下げて例外と処理するのはためらいがある⁽⁵⁾。そもそも君子を当てるのは左注「今案」の識見に過ぎないので、配列を重視して別の「少郎」(末弟)を実作者に擬する余地もある。西海道在任を条件としなければ「志賀の海人」をうたえないということ

はない。二七八歌左注の判断の根拠が、あるいは、

志賀の海人の火氣焼きて立てて焼く塩の辛き恋をも我はするかも

(11・二七四二 寄物陳思)

右一首或云石川君子朝臣作之

であつたかとも考えられ、これと類想の歌が、

志賀の海人の一日もおちず焼く塩の辛き恋をも我はするかも

(15・三六五二 遣新羅使人歌)

須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも我はするかも

(17・三九三二 平群氏女郎)

のように看取されるとすると、この種の歌はそもそも特定の個性と結合しにくい性質を帯びていると言える。集中に「志賀の海人」を詠む歌は、ほとんどが作者の名を伝えない。

志賀の海人の釣舟の網堪へかてに心に思ひて出でて来にけり

(7・一二四五 羈旅作)

志賀の海人の塩焼く煙風をいたみ立ちは上らず山にたなびく

(7・一二四六 羈旅作)

志賀の海人の塩焼き衣なれぬれど恋といふものは忘れかねつも

(11・二六二二 寄物陳思)

志賀の海人の釣し燈せるいざり火のほかに妹を見むよしもがも

(12・三二七〇 羈旅発思)

志賀の海人の磯に刈り乾すなりのりその名は告りてしをなにか逢

ひ難き (12・三一七七 羈旅発思)

志賀の浦にいざりする海人家人の待ち恋ふらむに明かし釣る魚

(15・三六五三 遣新羅使人歌)

このうちには、「志賀の海人」を実見しての詠もあれば、臨地することなく既知情報を援用したにすぎないものもあるだろう（波線部は序詞）。「塩焼き」「藻刈り」など海辺の労働が都びとの関心を惹く歌材として共有されていればこそ、平群氏女郎歌のような地名の置換・再構成が可能だったのだし、伊勢「むかしの歌」もまたかように流動する歌の群れのなかに位置していたことが改めて確かめられる。

ただし、石川少郎歌をそれらとまったく同列に見なしてよいかどうかは検討の要がありそうだ。一首の趣旨について和歌文学大系『萬葉集』（稲岡耕二氏）は「はげしい海女たちの労働を詠む歌」とし、伊藤博氏『萬葉集釈注』にも「激しい労働に追われて身なりを整えるゆとりもない志賀の海女たちの、荒くれた物めずらしい姿に興を寄せた歌」とするが、評価は最終的にそこに到着するのだとしても、たとえば次のような歌に較べるときに質の異なりを感じさせるのである。

大宮の内まで聞こゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び声

（3・二三八 長奥麻呂）

海人娘人玉求むらし沖つ波恐き海に舟出せり見ゆ

（6・一〇〇三 葛井大成）

海人娘子棚なし小舟漕ぎ出らし旅の宿りに梶の音聞こゆ

（6・九三〇 笠金村）

これやこの名に負ふ鳴門の渦潮に玉藻刈るとふ海人娘子ども

（15・三六三八 田辺秋庭）

集中に海人・海人娘子を詠む歌は夥しく、それらには海人のふるまいに驚嘆や好奇、また羨望のまなざしを向けるものが少なくない。

しかしながら、詠作者にとって想像すら及ばないその行動・技能（破線部）は、あくまでも海辺を旅する折の特徴的景物としてのみ認識されており、

朝開き漕ぎ出て我は湯羅の崎釣する海人を見て帰り来む

（9・一六七〇）

とあるように、しばしば「見て帰」るべき物珍しい対象とはされるけれども、都市民である自身とはおよそ交わるころのない存在として扱われている。

風のむた寄せ来る波にいざりする海人娘子らが裳の裾濡れぬ

（15・三六六二）

難波潟潮干に出でて玉藻刈る海人娘子ども汝が名告らさね

（9・二七二六 丹比真人）

露出した肌の健康美にたまさか恋情をかき立てられることがあるとしても、それは家郷を離れて旅する開放感に基づく衝動でしかない。万が一にも自らと海人との間に接点結びそうになると、

網引する海人とか見らむ飽の浦の清き荒磯を見に來し我を

（7・一一八七）

浜清み磯に我が居れば見む人は海人とか見らむ釣もせなくに

（7・二二〇四）

とうたつてただちにそれを回避しようとし、無意識のうちに海人を蔑みの対象へ追いやるのだった。

こうした傾向にあつて、石川少郎歌は海人を都びとの価値観の範疇に置きつつ把握しているように見える。「いとまなみ」の表現を備える点がその印象を抱かせる所以である。

「いとま」（「いつま」を含む）の語は萬葉集に十二例を見る。

- a いとまなく人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも
(4・五六二 大伴百代)
- b 我が背子に恋ふれば苦しいとまあらば拾ひて行かむ恋忘れ貝
(6・九六四 坂上郎女)
- c ももしきの大宮人は今日もかみいとまをなみと里に出でざらむ
(6・一〇二六 伝・豊嶋采女)
- d いとまあらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄るといふ恋忘れ貝
(7・一一四七 「撰津作」)
- e いとまなみ来まさぬ君にほとときす我かく恋ふと行きて告げこそ
(8・一四九八 坂上郎女)
- f いとまなみ五月をすらに我妹子が花橘を見ずか過ぎなむ
(8・一五〇四 高安)
- g いとまあらばなづさひ渡り向つ峰の花も折らましものを
(9・一七五〇 高橋虫麻呂歌集)
- h ももしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてここに集へる
(10・一八八三)
- i ひさかたの月は照りたりいとまなく海人のいざりは燈し台へり見ゆ
(15・三六七二)
- j 我が妻も画に描き取らむいつまも旅行く我は見つつ偲はむ
(20・四三二七 物部古麻呂)
- k あかねさす昼は田給びてぬばたまの夜のいとまに摘める芹これ
(20・四四五五 葛城王)
- 当該歌 志賀の海人はめ刈り塩焼きいとまなみくしらの小櫛取りも見なくに

このうち i は海人の営みを観察する点で当該石川少郎歌と重なるかのごとくだが、これは海人の漁り火の連続を「いとまなく」と形容するもので、しきりに眉を搔く動作をいう a とは近いものの、他の十例とは含むところがちがう。小学館『古語大辞典』が「いとま」の語義を七通りに説くうち a・i は「すきま、絶え間」の意に相当し、残りはいずれも「自由にできる時間的ゆとり、ひま」の意に当たると見てよい。後者には物理的な「ゆとり」に加えて精神的なニュアンスが包含されている。

a・i を除く十例は、表現様式に着目すると次のように分類できる。

ア(いとまあらば)——b・d・g

イ(いとま(を)なみ)——c・e・f・当該歌

ウその他——h・j・k

アは、仮に「いとま」があつたなら「恋忘れ貝」を拾うとか「向つ峰の桜の花」を折るとかの行為に及ぼうという意志を述べるもので、イは、「いとま」がないゆえに宮から里に出て女のもとに通つたり、花橘を見たりすることができないと慨嘆するもの、両者はもとより表裏の關係にあり、アにあつても現実には余裕が得られずしそれらの行為を断念せざるをえない、という心境に収斂するものが多いのだらう。その点はウも同じで、h について『萬葉考』が、

集中に大宮人はいとまなしとよみたるぞつかふる人の常なるをこ、は春の野に梅の花かざしつ、遊ぶ日なれば、いとまあれやとよめる。

と説いたとおり「いとまあれや」には「ふつうは暇がないはずなのに」の心情が前提されている。ごく僅かな「いとま」を見いだして

梅をかざす風流は称賛に値し、昼間の多忙な作業の後の夜間に摘み得た芹にはこの上ない価値が備わるのである。

c・hに「大宮人」が詠まれるのは象徴的であり、jを除くと「いとま」は専ら都市生活者の関心事であった。つまり、律令制官僚機構の中で生息する官人らに日常的に抱かれる多忙感と、それに基づく閉塞感・不充足感がア・イの表現様式を通して吐露されているのである。「いとま」がありさえすれば、彼らは、生存を左右しない一見無駄な、しかしながら優美で風雅なふるまいを繰り広げたいものと切望しており、それを実現しえない「いとま」のない現状は不本意だと訴える。「いとま」は都市民にとって、自由な精神を保持するために必須の条件だった。

かように見れば、石川少郎歌の構想は大宮人の価値観の上に立脚しており、海人の実態に即したものではないことが知られる。「め刈り塩焼き」は海人の日常的生業なので、その過重な労働を憂える者はいくついても、それを風流と対極の鬱屈した事態と嘆じる海人はおそらく存在するまい。「くしらの小櫛」を取り見るゆとり(いとま)の確保は都市生活者に内在する願望、海人娘子自身の欲求はそれとはまったく別のところにあつたはずである。

海人・海人娘子をうたう萬葉集歌は、結局のところみな都びとの視点からとらえられたものばかりだから、石川少郎が律令官人の価値観をもつてうたうことを奇異とするのは当たらない。ただし、何らかの契機を得てこの歌びとは海人の質実な暮らしぶりを自らの規矩に則って、風流の観点から受け止めることを試みた。主意が多忙な海人への同情にあるのか、敬服あるいは逆に軽侮を向かわせたものか、コンテキストを復元できないため不明とするほかないが、い

ずれにしてもこの試みによって海人の生活と都びとの意識との間に回路が繋がったことには注意しなければならない。本来交わるはずのなかった異文化が須臾の接触を遂げたのである。

五

考えてみれば、塩焼く海人に黄楊小櫛、伊勢物語「むかしの歌」に成り立つアンビバレンスは右の偶然がもたらしたものでなかったか。石川少郎歌にすでに内在しているある種の不整合が歌語「つげの小櫛」を得て昇華する、そのときに触媒の機能を果たしたのが「いとまなみ」の表現だったと、小稿は見当をつけてみたい。そうだとすると、伊勢八七段の構想にも波及する文学史的スケールを獲得しそうな予感がしてくるのだが、たぶんそれは単なる気の迷いにすぎないのであろう。

注

- 1 神戸市教育委員会編「深江北町遺跡第12・14次調査埋蔵文化財発掘調査報告書」(奈良文化財研究所公開の「全国遺跡報告総覧」による／<https://sitereports.nabunken.go.jp/10642>)
- 2 藤井高尚「伊勢物語新解」折口信夫「伊勢物語」(『折口信夫全集ノート編』第十三巻)ほかが採用する解釈。
- 3 阪口和子氏「万葉集と伊勢物語」(『伊勢物語 虚構の成立』竹林舎、二〇〇八年)
- 4 「くしげのをぐし」の語形を含む和歌は本文に引用した夫木一五四〇歌、新勅撰一三三七歌のほかに歌学書「定家物語」などにも見えるが、載録されるのはいずれも萬葉集二七八歌である。

5 西宮一民氏『萬葉集全注卷第三』は神龜年間の石川君子歌をこの位置に配したことに付き、黒人二七六、七歌が「その土地その土地での地名や景物に因んでの即興的な作」であり、当該歌も等質の即興性をもつ「言語と風習の醸し出す野性的なものへの魅力」を備えた歌ということでここに「追加」したものであるという理解を示すが、詭弁に近い。

6 小学館『古語大辞典』「いとま」の項はその語義を、①自由にできる時間的ゆとり。ひま。②出仕しないで自由すること。休暇。③辞職。辞任。

④喪に服するために、出仕しない期間。⑤いとまごい。離別のあいさつ。

⑥離婚。離縁状。⑦すきま。絶え間。の七通りに分けて説いている。

7 「いとま」の表現性については拙稿「豊嶋采女の恋の歌―右大臣橘家四首宴席歌考―」（『萬葉和歌の表現空間』塙書房、二〇〇九年／初出は二〇〇八年）で触れることがあった。

8 初句「然之海人者」、「然」は集中に指示副詞の表記に用いられることが多い字で、その承ける文脈を予想させる。たとえば一首の素性が宴席詠だったとして、同座に「志賀の海人」を話題にした先行詠があれば、それを引き受けて発想された可能性が考えられよう。

（かげやま・ひさゆき 本学教授）